

10000年前	縄文時代草創期	大形石槍・局部磨製石斧・矢柄研磨器・有舌尖頭器など多様な石器が登場するが、しだいに石鏃が普及する(①81・91)
		隆起線文・爪形文・円孔文・押圧縄文土器に続き、回転縄文を用いる多縄文系土器がつけられる(①87)(田沢・壬・本ノ木・小瀬ヶ沢洞窟・室谷洞窟遺跡)
		洞窟も居住の場として利用される(①85)(小瀬ヶ沢洞窟・室谷洞窟)
8000年前	早期	縄文・燃糸文で器面をかざる尖底形態の燃糸文系土器がつけられる(①94)(室谷洞窟)
		山形文・楕円文・格子目文・菱目文・綾杉文などの押型文土器や石匙・擦截磨製石斧・剥片石器がつけられる(①96)(卯ノ木・下別当遺跡)
		二枚貝の鋸歯状腹縁やヘラを施文具とする貝殻・沈線文系土器がつけられる(①99・100)(室谷洞窟・卯ノ木・岩原遺跡)
		貝殻の背で器面内外を擦り付ける貝殻条痕文土器がつけられる(①102)(室谷洞窟・藤平・元卯ノ木遺跡)
6000年前	前期	胎土に繊維を含み、器面を羽状縄文でかざる羽状縄文系土器様式が普及し、器形も丸底から平底となる(①104)(布目・高塩A遺跡)
		半截竹管による平行沈線・爪形文や浮線文を施す土器がつけられる(①113)。遺跡が砂丘や低地にも営まれるようになる(①117)(鍋屋町・山草荷・刈羽貝塚遺跡)
		●状耳飾が製作・使用される(①117)
		縄文海進が最大となる(①17・109)
		東北部の円筒土器、東南部の大木式土器が海岸部にもたらされる(①121)(府屋上山・貝屋・椎崎遺跡)
5000年前	中期	木目状燃糸文・蓮華文・絡条体圧痕文などが施された新保・新崎式土器様式が行われる(①124)(剣野E・古屋敷遺跡)
		土偶の製作が盛んに行われる(①142)(吉野屋・栃倉・馬高・長者ヶ原遺跡)
		大形の鶏頭冠突起、流麗な隆帯でかざられる火焰土器がつけられる(①127)(馬高・岩野原遺跡)
		竪穴住居出入口に埋甕が設けられる(①144)(寺地遺跡)
		竪穴住居に複式炉が設けられる(①139)(沖ノ原・森上遺跡)
		硬玉製大珠・石棒等、儀器的な遺物が発達する(①145)(長者ヶ原・森上遺跡)
		大集落が形成され、遺跡数も縄文時代を通じて最多となる
		住居の床面に石を敷く敷石住居がつけられる(①139)(岩野原・沖ノ原・宮下原遺跡)
4000年前	後期	器面全体に刺突文を施す新潟県独自の三十稲場式土器様式が各地に広がる(①153)(三十稲場・ツベタ・城ノ腰遺跡)
		磨消手法による曲線的な入組文が全国的に盛行する(①155)(上山・三仏生・刈羽大平遺跡)
		粘土粒を貼付する瘤付土器様式がつけられる(①158)(中野・藤堂遺跡)
		石棺を有する配石遺構や土墳墓などの墓制が行われる(①186)(寺地・籠峰遺跡)
		抜歯の習俗が現れる(①158・184)(三宮貝塚)
		精製・粗製土器の区別が明瞭になり、器種も多様化する一方、用途不明の土器も出現する(晩期中葉まで)(①184)
3000年前	晩期	東北地方に中心をもつ亀ヶ岡式土器様式の圏内に包含される(①172)(村尻遺跡)
		土偶・土版・石棒・石剣・石冠・耳飾などの呪術的遺物が多様化する(①182)
		低地に集落が営まれる(①171)(長畑・矢津遺跡)
		浮線文・工字文を特色とする土器様式が盛行する(①173・206)(鳥屋・藤橋遺跡)